

米海軍 海上自衛隊 陸上自衛隊

2017年8月10日

リムピース編集委員 篠崎正人

基地の概要

米海軍

基地面積 4,588,572 m² (約 4.6 ヘクタール)

沖縄県うるま市ホワイトビーチ基地に司令部を置く第1揚陸即応群(ARG-1)の指揮下にある第11揚陸戦隊(COMPHEBRON 11)に所属する4隻の揚陸艦と4隻の掃海艦が配備されている。(旗艦は強襲揚陸艦ボノム・リシャール)

所属人員は軍人3,486名、軍属447名、家族1,935名、(合計5,468名)。

駐留軍契約従業員1,450名(2017年3月現在)。

米海軍佐世保基地司令官(海軍大佐)管轄化の部隊

組織名(部)	主要な任務
管理部	司令部の総務及び統括
弾薬部	弾薬の補修、受領、配給、品質評価、保守作業
港務部	出・入港艦船の調整とタグボートなどの支援
補給部	食堂、郵便、ゲスト宿舎、物品の補給の管理
警備部	基地内犯罪の捜査、ゲート警備、警備訓練、施設警護
施設部	施設全般の維持管理、住宅管理、清掃、運営契約他
消防部	消防隊運営、前畑、針尾、燃料廠に分遣隊
統合安全部	施設所在部隊全般の警備企画、管理
特別補佐官事務所	法務室、教会、海兵隊連絡事務所、基地内大学管理
クラブ・レクリエーション部	福利厚生施設管理運営
軍人・家族援助センター	就学・医療支援相談など

そのほかの寄留(テナント)部隊

部隊の名称	任務	原隊または本部
艦船修理廠佐世保分所	米軍艦船の修理	横須賀
横須賀配給センター佐世保支所	燃料補給、資源管理、艦船支援	横須賀
西太平洋兵站部佐世保支所	軍事物資の輸送、補給、管理	シンガポール
第1水陸両用群佐世保分遣隊	揚陸作戦指揮	沖縄・うるま
第11水陸両用戦隊	揚陸艦隊作戦指揮	沖縄・うるま
第76任務部隊(CTF-76)	揚陸作戦部隊支援	沖縄・うるま
海軍移動建設大隊佐世保分遣隊	施設、設備、土木等の建設支援	沖縄・北中城

第5海軍移動爆発物処理部隊	機雷処理、不発弾処理など	グアム
極東契約本部佐世保支所	各種役務及び物品購入の契約	東京・横田
横須賀施設本部佐世保支所	施設管理運営	横須賀
佐世保食糧品販売所	ストアー運営	
星条旗新聞佐世保支所	新聞編集と配送	東京・横田
米海軍法務部佐世保事務所	法務処理	横須賀
米海軍捜査局佐世保支所	海軍兵士の犯罪捜査	米本土？
民間人人事部	基地従業員の人事	
太平洋地域放送部隊佐世保支局	米軍放送局	ハワイ
海軍佐世保診療所・歯科診療所	米兵と家族の総合診療	横須賀
横須賀印刷部佐世保支所	基地内機関紙発行	横須賀
学校	幼稚園、小・中学校、高校運営	東京・横田？
合衆国サービス機関（USO）	基地内売店運営	

海上自衛隊

基地面積 1,076,000 m²。第2護衛隊群(第2護衛隊・第6護衛隊)、第13護衛隊・第16護衛隊、第1海上補給隊分遣隊などの司令部が設置されている。

所属する艦艇は、護衛艦 16 隻・補給艦 2 隻・掃海艇 3 隻・ミサイル艇 2 隻・輸送艇 1 隻・多用途支援艦 1 隻。

佐世保地方総監部＝海上自衛隊佐世保警備区の基地(佐世保、下関、沖縄、鹿児島、大村、対馬など)を管轄する統括本部。うち、佐世保地区には約4,900名(2014年2月現在)が所属している。

第2護衛隊群。

佐世保地方隊

九州から南西諸島一帯という広範囲をカバーし、下関・那覇にも掃海艇などの艦艇を展開させている。鹿児島県・鹿屋や長崎県・大村などの航空隊もその管轄下。

陸上自衛隊

基地面積 1,698,000 m²、第3教育団本部及び第118教育大隊、車両教育隊、第5陸曹教育隊及び実戦部隊として西部方面普通科連隊が配備されている。

2002年3月、「島しょ防衛」などを目的とした西部方面普通科連隊が発足。

2013年12月 佐世保に新編成の「水陸両用部隊」配備計画を発表

主要な日米の軍事施設

- ① 米海軍前畑弾薬庫
- ② 米海軍赤崎岸壁
- ③ 米海軍赤崎貯油所

本船貯油所、庵崎貯油所、横瀬貯油所と合わせ、総数84万キロリットル(超大型タンカー4隻分)の貯油能力がある。2015年3月以降、赤崎貯油所に設置してあるヘリパット(ヘリコプター降着帯)に新型輸送機オスプレイ(MV-22)が延べ、24回にわたって飛来した。

④ 海上自衛隊佐世保地方隊(倉島地区)

九州周辺から沖縄・南西諸島を範囲として、主に沿岸警備に当たっている艦隊の係留施設。3隻の護衛艦は次のとおり()内は艦番号

「さわぎり」(157)、「あさゆき」(132)、「じんつう」(230)

このほか、掃海艇、小型タンカーなど各種支援艦艇で編成されている。

⑤ ドライドック地区(米海軍及び日本の民間企業)

⑥ 米海軍メインベース・平瀬地区

⑦ 米海軍平瀬係船地(米軍通称名「ジュリエット・ベースン」)

⑧ 海上自衛隊立神棧橋

2本の棧橋に1~4号までの接岸設備がある、海上自衛隊護衛艦隊の停泊棧橋。佐世保基地に配備されている護衛艦隊の艦船は次のとおり()内の数字は艦船番号

護衛艦

「いせ」(182)、「しまかぜ」(172)、「こんごう」(173)、「ちょうかい」(176)、「あしがら」(178)

「あまぎり」(154)、「はるさめ」(102)、「ゆうだち」(103)、「きりさめ」(104)、「あけぼの」(108)

「ありあけ」(109)、「あきづき」(115)、すずつき(117)

補給艦 「はまな」(424)、「おうみ」(426)

⑨ 米海軍立神係船地(米軍通称名「インディア・ベースン」)

配備されている艦船は次のとおり。()内の数字は艦船の番号

強襲揚陸艦 ボノム・リシャール(6) ドック型輸送揚陸艦 グリーンベイ(20)

ドック型揚陸艦 ジャーマンタウン(42)、同 アシュランド(48)

掃海艦 パトリオット(7)、パイオニア(9)、ウォーリアー(10)、チーフ(14)

そのほかの主な施設

米軍針尾住宅

ハウステンボスに隣接する住宅地。米海軍佐世保基地の下士官以下の兵士用住宅。最終的には約8500人が住む住宅地となるよう拡張が進められている。

米海軍横瀬貯油所(西海市)

前面海域を埋め立てて、LCAC(ホバークラフト型上陸用舟艇)の駐機場と整備場を建設し、崎辺のLCACを移転した。最大12機のLCACを受け入れる可能。(現在は8機)

海上自衛隊針尾島弾薬

護衛艦隊や地方隊の艦船用の砲弾などを保管。入江の左奥の金山弾薬庫には護衛艦に搭載しているミサイルなどが貯蔵されている。近年、弾薬庫の整備と拡充が進められている。

米海軍針尾島弾薬集積所

野積み用の施設で、北側の安久の浦、南側の牛の浦を取り巻く丘にトンネル(地下式)弾薬庫など

がある。中央にある建物は弾薬などの点検・修理を行う施設。1996年までは爆発物処理部隊が駐留していたが、その後岩国に移動した。07年6月、前畑弾薬庫の移転先として整備する計画が明らかにされた。

崎辺地区野積み場

揚陸艦に搭載するホバークラフト型上陸用舟艇(LCAC)の整備場だった。露天での整備場だったが、西海市横瀬町にある横瀬貯油所施設の前面海域を埋め立てて建設されたLCAC整備場が3月中に米軍に提供され、その後は閉鎖し野積み場に。

この地区に陸上自衛隊の水陸両用車輛隊の配備が計画され、施設建設が始まった。

海上自衛隊崎辺地区

艦船の磁気測定所、高速ミサイル艇の繋留岸壁、海上自衛隊教育隊施設、大田貯油所等がある。隣接している佐世保重工(SSK)の用地を買収し、海上自衛隊の輸送・揚陸艦用の栈橋を建設する計画が明らかになった。

配備されている高速ミサイル艇は「おおたか」(PG-826)と「しらたか」(PG-829)

陸上自衛隊相浦駐屯地

戦前より旧・陸軍第2海兵団が置かれ、戦後連合軍に接收。朝鮮戦争の際には米軍の集積・訓練地となっていた。

現在は陸上自衛隊即応部隊(西部方面隊普通科連隊)が駐留している。

将来、新編成の強襲上陸部隊である「水陸両用軍」の司令部を配備する計画がある。

関連施設

長崎空港(大村市)

国管理の地方空港だが、専用の空港を持たない米海軍佐世保基地へのアクセスのため日米地位協定に基づいて利用されている。もっぱら人員輸送用。

厚木、岩国などへの定期便の運航などで年間離発着回数は最大時で360回近くに上っていた。現在は米軍の予算削減により年間100回以下の運用回数となっている。

主な飛来機種はC-40(B-737型機の軍用改造版)、C-24(ビジネスジェットの軍用改造版)など人員輸送用。ただし、高級将校や大使・領事の場合は福岡空港を利用している。

福岡空港(福岡市)

「板付飛行場」として戦後の占領時代から米軍が使用している。返還後も専用空港を持たない佐世保基地のために地位協定に基づいて利用されている。

貨物輸送システムを持たない長崎空港に代わり、もっぱら貨物輸送機(C-130)が定期的に飛来している。

= 2016年 米海軍佐世保基地の動き =

1、 母港艦船の動き

訓練名称など	参加艦船名	地域・国	期間
	アシュランド	タイ・サタヒップ	2月5日～9日
COBLA GOLD	アシュランド	タイ	2月10日～17日
	アシュランド	タイ・サタヒップ	2月18日～21日
		韓国・プサン	3月3日～6日
	ボノム・リシャール	韓国・プサン	3月3日～6日
	ジャーマンタウン	韓国・鎮海 (チネ)	3月3日～6日
双龍 (SSANG YONG)	ボノム・リシャール	韓国	3月9日～18日
	ジャーマンタウン		
	アシュランド		
CARAT	アシュランド	マレーシア・サンダカン	6月1日～6月4日
		フィリピン	6月6日～10日
		タイ・サタヒップ	6月15日～18日
		シンガポール	6月24日～27日
		インドネシア	8月3日～8日
VALIANT SHIELD	ボノム・リシャール	フィリピン海	9月12日～22日
	グリーンベイ		
	ジャーマンタウン		
	ボノム・リシャール	中国・香港	9月29日～
	グリーンベイ		10月1日
	ジャーマンタウン	フィリピン・マニラ	
	ボノム・リシャール	フィリピン・	10月5日
	グリーンベイ	スービック	
	ジャーマンタウン		
PHIBLEX	ボノム・リシャール	フィリピン・	10月6日～11日
	グリーンベイ	ルソン島	
	ジャーマンタウン		
	グリーンベイ	マレーシア・	10月15日～16日
		コタ・キナバル	
	ボノム・リシャール	シンガポール	10月16日～17日
	ジャーマンタウン	カンボジア・	10月16日～17日
		シアヌークビル	

2、 増加する情報収集艦の寄港

2009年以降、情報収集を任務とする音響測定艦、測量（海洋調査）艦、弾道ミサイル観測艦の中では音響測定艦の寄港回数が突出している。2006年から始まった音響測定艦の寄港は2010年（39回）をピークに、16年も過去5番目の寄港回数（27回）となった。

音響測定艦は潜水艦を捜索・追尾することを任務としており、中国や北朝鮮の潜水艦を主要な捜索の対象にしていることを示すように、米海軍が運用する5隻の音響測定艦のすべてが西太平洋に展開している。特に中国海軍（人民解放軍海軍）の潜水艦については行動範囲がグアム周辺の西太平洋にまで広がり、さらに静粛性も向上しているところから、重点的に調査している様子がうかがわれる。

2006年までは佐世保にほとんど寄港することがなかった音響測定艦が2010米会計年度以降に増加した背景には、外洋から大陸沿岸の水深が比較的浅い海域を任務海域にするという米海軍の潜水艦の運用の変更と合わせ、中国海軍の急速な海洋進出と関係があると思われる。

情報収集艦は西太平洋補給運用司令部（COMLOGWESTPAC 事務所はシンガポール）の指揮下にあり、南シナ海および東シナ海、フィリピン海、日本海で任務にあたっているようで、佐世保や沖縄への寄港は休養や補給、連絡のためだろう。

音響測定艦と測量（海洋調査）艦、弾道ミサイル観測艦など情報収集艦船の入港回数は、母港艦を除いた艦船の入港回数の29・3%（前年は21・3%）となった。

3、 最多となった洋上補給艦

佐世保港に寄港する米軍艦船では燃料補給艦（AO）、貨物弾薬補給艦（AKE）、高速戦闘支援艦（AOE）といった洋上補給艦が主要な艦種となっていたが、2016年、洋上補給艦の入港回数はこの6年では最多となった。また、入港した艦船の用途別（作戦艦、洋上補給艦、貨物輸送艦、燃料輸送船、情報収集艦、各種補助艦船）での割合でも36・9%を占め、最も多くなっている。

貨物弾薬補給艦の西太平洋での拠点はグアム・アプラ港だが、作戦海域である東シナ海や南シナ海などとの地理的關係、あるいは燃料備蓄施設の充実の理由から日本では佐世保に集中的に寄港しており、日本国内の基地で佐世保以外では横須賀に13回、沖縄・天願に2回、沖縄・ホワイトビーチに2回だけ寄港した。

なお、米海軍は貨物弾薬補給艦を14隻運用（16年12月現在）しているが、そのうちの2隻（ルイス\$クラーク、サカガウェア）は海兵隊専用として運用されている。

このなかで佐世保には14隻中9隻が寄港したが、韓国海軍基地がある韓国慶尚南道・鎮海（チネ）や戦時補給施設に指定されている慶尚南道・光陽（クァンヤン）との行き来が目立っている。

4、 戦闘艦の動き

原潜寄港が過去最多に

原潜は10隻が延べ24回（前年は13回）寄港し、過去最多の回数となった。このうち、寄港回数的大半を占めたのが人員の移送や情報伝達のための一時寄港（14回、前年は6回）だった。

一方、平均停泊日数は3・5日（前年は3・6日）とこの数年、大きな変化はない。ほかの在日

米海軍基地への寄港と比較すると、最も寄港回数が多い沖縄・ホワイトビーチはほぼすべてが一時寄港（平均停泊日数1・1日）、ほとんどが長期停泊の横須賀（平均停泊日数7・6日）、その中間の佐世保という傾向に大きな変化はない。

平均停泊日数は2013年からほとんど変化はなく、各基地の一途家は変わらないまま運用拠点が佐世保にシフトされた、ということだろう。

ちなみに、在日米軍基地への原潜の寄港回数では沖縄・ホワイトビーチが20回、合計停泊日数は21日（前年は21回 停泊日数35日）、横須賀は15回、合計停泊日数106日（前年は16回 停泊日数119日）、佐世保は24回、合計停泊日数84日（前年は13回、合計停泊日数は47日）だった。

ちなみに、米海軍によると原潜の任務はこれまでの対水上艦、対潜水艦、艦隊防御戦闘に加え、情報収集、監視、偵察（ISR）も与えられているという。

駆逐艦・巡洋艦も増加

南シナ海での緊張が影響して、駆逐艦と巡洋艦の寄港が急増した。このうち、米本土から洋上活動グループ（PAC SAG）を編成し5月から11月までアジア・インド洋・西太平洋に展開していた3隻の駆逐艦（ディケーター、モムセン、スプルーアンス）は佐世保に延べ10回寄港した。3隻のうち2隻は第7艦隊の司令部がある横須賀に5月に寄港した後は、佐世保を補給と休養の拠点として周辺海域に展開していた。

最初に入港したのはカリフォルニア州サンディエゴ海軍基地に所属する駆逐艦ディケーター（DECATUR DDG-73）で India（立神）1号岸壁に、続いてワシントン州エベレット海軍基地に所属するモムセン（MOMSEN DDG-92）が India（立神）6号岸壁に停泊した。また、スプルーアンスは米沿岸警備隊（USCG）とともに排他的経済水域の警備訓練に参加していた

横須賀基地が空母や駆逐艦などの配備艦船で余裕がないため、そして任務海域に近いところから佐世保に寄港を繰り返していたと思われる。

6月に行われた日・米・インド海軍によるマラバール2016は佐世保を中心に開催され、米海軍の巡洋艦やインド海軍の駆逐艦が佐世保に集結した。

また、横須賀に配備されている駆逐艦や巡洋艦も燃料補給や休養のためたびたび寄港した。横須賀基地の補完機能が充実してきたためと思われる。

5、 揚陸補助艦が新規参入

米軍の揚陸手段に変化が表れている。これまでの強襲揚陸艦やドック型揚陸艦を使った貨物や車両の揚陸作戦を支えるため新たな種類の艦船の開発と配備が進められている。また、同時に予算削減のため一部を民間委託する流れが定着している。そのうちの 하나가 ESD（Expeditionary Transport Dock MLP から変更）と命名された揚陸補助艦で、洋上や岸壁などで揚陸艦に直接、LCAC や戦闘車両を積み替えるシステムを持った輸送艦だ。最初に就役したモンフォード・ポイントが横浜や横須賀、佐世保に寄港し、運用訓練のような動きを見せている。

モンフォード・ポイントは34名の民間人（MSC 所属）で運用されており、揚陸艦での輸送と

比較すると格段の兵員削減（省力化）が可能となっている。ESD はすでに3番艦までが就役し、さらに1隻の建造が進められている。

すでに7月25日、九州西方海上で海兵隊の事前集積艦デールと洋上での移送訓練を行っていた。モンフォード・ポイントの実際の運用は米海軍の音響測定艦などと同様に、世界最大海運会社マースク（MAERSK）ラインが行っている。

今後の進展によっては佐世保に配備されている揚陸艦の運用にも影響が出てくるだろう。

6、 オスプレイ（MV22）が飛来

艦船ではないが、沖縄・普天間基地に配備されている新型輸送機オスプレイが2015年3月から飛来するようになった。2016年も11回にわたって延14機が飛来した。飛来目的では市長や議員を含む佐世保市関係者や防衛産業関係者の体験搭乗や地域防災訓練への参加、給油や完熟飛行など、多岐にわたってきている。

5月には佐賀空港に「自衛隊のオスプレイを配備する計画に伴う騒音調査」を目的に、佐賀県の要請に応じて飛来した。

日本側の施設を使用するにあたっての協定上の根拠として、地位協定第2条による提供施設（赤崎貯油所）、同第2条の自衛隊施設の共同使用（海上自衛隊崎辺地区）、同第5条による自由アクセス権（佐賀空港）と、さまざまなバリエーションとなり、将来、日本各地の空港や自衛隊施設の制限のない使用へのステップとなっている。